

令和元年度

鳴門教育大学大学院学校教育研究科

教科・領域教育専攻 生活・健康系コース（保健体育）

修士論文公開審査会 中間発表会



日時：令和2年2月11日（火）9：00～12：20

場所：地域連携多目的ルーム



令和元年度生活・健康系（保健体育）コース 修士論文公開審査会・中間発表会

(1) 日時：令和2年2月11日(火)

(2) 場所：地域連携多目的ルーム

(3) 次第

1)開会の辞：松井敦典先生 9:00～

2)修士論文公開審査会 9:05～11:30（発表5分・質疑15分）

3)修士論文中間発表会 11:35～12:20（発表10分・質疑5分）

		氏名	指導教員	開始時間	論文課題
修 論 審 査	1	杉本 京太	湯口 雅史	9:05	運動部活動における補欠制度に関する一考察
	2	福田 まゆ		9:25	運動嫌いになる要因に関する検討ー幼児期の生活に着目してー
	3	森脇 康人		9:45	表現運動領域の学習における「恥ずかしさ」の検討ー「恥ずかしさ」の軽減のきっかけに着目してー きっかけ→傍点
	(休憩 5 分)				
	4	三好 徹	藤田 雅文	10:10	保健体育科教員の実務実態と健康状況に関する研究
	5	山田 智博	松井 敦典	10:30	バドミントン競技におけるハイバックハンド・ストロークの動作解析～飛距離に貢献する要因について～
	6	中川 沙弥	木原 資裕	10:50	剣道における熟達者と未熟達者の認知特性の違い
	7	田邊 航		11:10	中学校体育授業「剣道」における導入のあり方に関する研究
	(休憩 5 分)				
中 間 発 表	8	大原 航平	藤田 雅文	11:35	中学校サッカー選手とクラブチームのサッカー選手のサッカーに対する意識に関数比較研究
	9	小川 浩平	湯口 雅史	11:50	体育学習における円形の場合設定の意味と効果に関する一考察
	10	釜 圭吾		12:05	小規模校における合同体育授業の実態調査

運動部活動における補欠制度に関する一考察

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

杉本 京太

指導教員 湯口雅史

1. 緒言

近年、スポーツメディアの普及などスポーツを取り巻く環境の変化により、高校の運動部活動では「勝って注目されたい」というような勝利至上主義の風潮が強まっており、勝利することが絶対的な目的となっているチームが少なくない。そこには決まって試合に出る機会に恵まれない「補欠」という立場の部員が存在することになる。また最近、指導者によっては、「補欠」の立場を成長できるポジションとして捉える指導の傾向もあるようだ。

先行研究の多くは、補欠部員の心情を葛藤や参加動機という視点でアンケートにより実施したもので、高校生を対象とした現在の補欠部員の感じるありのままの心理状態にスポットを当てたものではない。

2. 研究方法

2-1. 研究目的

本研究は、高校の運動部活動を引退して間もない部員にインタビューし、当事者の心理状態や所属している部の運動の見方、考え方、感じ方を理解し、「補欠制度」について考察していく。さらに、複数種目の運動部活動を比較することで試合でのプレー機会頻度によるスポーツへの意識の差異についても検討し、補欠部員への指導や補欠制度から生まれる負の側面の緩和に活かすことを目的とする。

2-2. 方法

(1)データ収集法

- ①事前訪問による記述式アンケート
- ②半構造的インタビュー
- ③フィールドノーツ

(2)分析方法

質的分析用ソフトウェア MaxQDA

3. 研究の実際

3-1. 補欠の定義

レギュラー以外の立場。レギュラーに比べると試合出場機会に圧倒的に恵まれない。

3-2. 研究対象

- (1)徳島県のN高校の部活動部員 10名
(野球部、サッカー部から5名ずつ)
- (2)一つの学校から複数チームの出場が可能なリーグ戦の存在から、サッカー部の補欠部員は、野球部の補欠部員に比べ試合出場機会に恵まれている。

4. 結果

10名へのインタビューから19のカテゴリのグループが抽出された。

筆者はそこから、「分析」、「意識すること」、「受け入れる」、「ポジティブとネガティブ」、「他者の影響・自分の実態」、「意味付け・捉え方・考え方」、「ポジティブ」、「ネガティブ」という組み合わせで各グループに着目し、考察と解釈を試みた。

5. 結論

本研究から次のことが見えてきた。

補欠部員は共通して、ネガティブな感情を抱いており、レギュラーメンバーや試合出場メンバーに選出されるための自分なりの分析を行っていることが見えた。

〈野球部補欠部員〉

- ①メンバーに選出されるため、サッカー部よりも具体的な分析を行っている。
- ②レギュラーを主役、自らを脇役だと思い、レギュラー部員に気を遣っている。
- ③周りから納得のいかない現状が次々と押し寄せられ、渋々受け入れるしかない状況にある。

これらは、野球部の補欠部員は試合出場に恵まれないということが原因として推測される。その結果、野球部補欠部員はプレー以外にもチームに役立っていることや外から与えられた物事に対して新しい価値を見出しそこに喜びを感じる、又は日頃からの指導される経験が少ないために親近感がある指導者に魅力を感じたりする傾向にあると解釈した。

〈サッカー部補欠部員〉

- ①試合に出られない、いいプレーができないことが、自らモチベーションを下げる。
- ②自らの喜びの場面は、チームの勝敗に関わらず、自分のベストプレーにある。

これは、サッカー部補欠部員は、レギュラーになれないというネガティブな感情は抱くが、最低限の試合出場は担保されている状況にあることが原因として推測できる。その結果、サッカー部補欠部員はスポーツをプレーする中に価値や意味を見出す、又はサッカーの技能の向上など専門的な上達意欲がある傾向にあると解釈した。

いわば、野球部補欠部員は、野球を入り口として部活動でスポーツ以外の新しい価値を見出すことができ、サッカー部は部活動内でサッカーをプレーする中でそのスポーツを極めることができると考えられる。

このように見ると、両部活動とも学習指導要領の示すスポーツとの親しみの中で学習意欲の向上と責任感、連帯感の涵養という学校教育の目指す資質・能力の育成は可能と考えられる。しかし、補欠部員が試合出場機会に恵まれる部活動ではそのスポーツの楽しさを学び、試合出場機会に恵まれない部活動ではそのスポーツ以外のものを学んでいるという見方もできる。自らの興味、関心に従って、自らで選んだスポーツの運動部活動では、ぜひその所属する運動部活動のスポーツ自体の楽しさを学ぶべきではないだろうか。そのために、「勝利主義」のチームであっても部内でレギュラー、補欠によって試合に出る者、出ない者が完全に区別される活動ではなく、全ての部員が試合でプレーを経験することが、部員の成長を保証する上で必要である。スポーツのルール上、試合出場人数が限られるのは致し方ない。しかし、ある一定の部員が試合出場の可能性がほとんどなく、「補欠部員」と呼ばれることはあってはいけなく考える。誰にでも試合に出られる可能性と権利が保障され、「スポーツをすることが楽しい」と感じることができるような部活動を求めていきたい。今後は、調査データのさらなる分析と共に、野球部、サッカー部以外での調査や中学校での調査を行い、補欠制度のあり方について思索していきたい。

運動嫌いになる要因に関する検討

—幼児の生活に密着して—

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

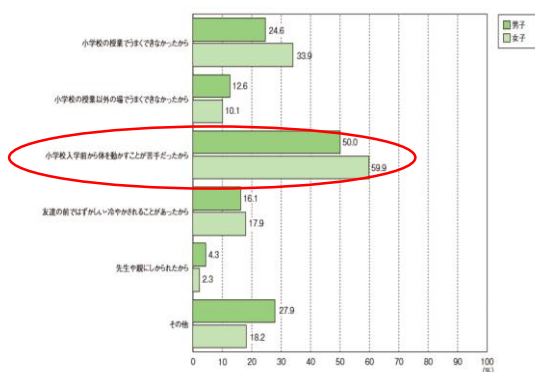
指導教員 湯口雅史

福田まゆ

1. 緒言

文部科学省によると、保護者をはじめとした国民の意識の中で、子どもの外遊びやスポーツの重要性を軽視し、子どもに積極的に体を動かすことをさせなくなったこと、また運動をよくする子とほとんどしない子の二極化が存在していることを指摘している。さらに平成26年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査によると、運動遊びが嫌いになったきっかけとして、「小学校入学前から体を動かすことが苦手だったから」という理由が多いことに気がつく。

○運動やスポーツが嫌いになったきっかけ
(表1)



(平成26年度全国体力、運動習慣等調査結果より)

幼児期運動指針(2012)では、「幼児期において、遊びを中心とする身体活動を十分に行うことは、多様な動きを身につけるだけでなく、心肺機能や骨形成にも寄与するなど、生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育ん

だりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくりとなる。」としている。幼児期の運動遊びが生涯にわたって健康で豊かに人生を送るために、重要であることがわかる。「運動嫌い」に関する研究は、小学校、中学校、高等学校などでのアンケート調査による研究は多くある。しかし、幼児期における運動嫌いに関する研究はあまりされていない。そこで本研究では、幼児の日常の運動遊びに参与観察者として入り込み、エスノグラフィーを用い、子どもの言動や保育者とのかかわり、保育環境などが運動嫌いや運動離れにつながってしまう要因に着目し、運動遊びに積極的な子とそうでない子の差異や子どもの気持ちの変化などについて解釈することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 研究対象

鳴門市内のS幼稚園園児

4歳児 男の子 8人
女の子 4人 計12人

5歳児 男の子 6人
女の子 12人 計18人

N幼稚園保育者

(2) データの収集と分析

① 収集方法

・実際に幼児の生活に密着し、参与観察を行い、データ収集を行う。

・観察内容（行動やしぐさ、発言など）を記述するフィールドノーツの作成を行った。

②分析

・エスノグラフィーで収集した質的データ（フィールドノーツ）を活用して解釈していく。

3. 結果と考察

運動嫌いや苦手意識をもってしまう要因として、以下のようなことが考えられる。

- ・やろうとする動機付けとなる保育者の関わりが欠けている。
- ・幼児が活動への期待や見通しが持てていない。
- ・つまずきやアクシデントを乗り越えるための保育者とのふれあいが欠けている。
- ・経験や能力に対する配慮や個人差に対する援助が見られない。
- ・多くの幼児が楽しめるためのルールの設定や共有が不十分である。
- ・自分の存在や頑張りを認めてくれたり褒めてくれたりする人の存在が不足している。
- ・場や空間距離、活動のスキルなどが幼児にとって適当でない。
- ・さまざまな遊び場や遊具など幼児にとって自由度の高い雰囲気欠けている、などが考えられる。

N 大学附属幼稚園に非常勤講師として勤務しており、附属幼稚園の子どもと関わる中で、運動に対して苦手・嫌いという意識をもっている子が少ないことに気付いた。その背景として、子どもたちの自由度の高さが関係しているように感じた。遊具などの環境の自由さ、保育者が強制して活動するのではなく、幼児がやりたいタイミングで活動を行っているような場面が多く見られた。その中で、先生方

が意識していることとして、（１）先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動できるようにする。（２）いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。（３）進んで戸外で遊ぶ。（４）様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。この４つが運動好きや運動を積極的にする子を育てるために大切にしているということが分かった。

4. 結論

以上の結果から、遊びとは「やりましょう」と言われてするのではなく、幼児が自発的に活動することが重要であり、「場の構成」、「使用用具」、「ルール」などすべて幼児からの提案で行うことができることが理想である。しかし、観察した様子から、保育者の人数や配置、幼児の発達段階の差などから、安全面や保育者の目が行き届く範囲などを考えるとなかなか難しい。よって、保育者が決めた時間に遊びが行われ、ルールも保育者側が提示したルールによって遊びが行われるため、遊びの種類によっては、幼児に個人差が生まれたり、今はやりたくないのにやらされているという、保育者がもっている教育的価値と幼児の思いや願いとのズレが生じている中であそんでいたのではないだろうか。このことが、運動遊びに対して苦手意識をもってしまう一つの要因になっているのではないだろうか。

表現運動領域の学習における「恥ずかしさ」の検討

－「恥ずかしさ」軽減のきっかけに着目して－

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース(保健体育)

森脇康人

指導教員 湯口雅史

1. 緒言

文部科学省が2014年に出した「武道・ダンス必修化」は、「ダンスは、『創作ダンス』、『フォークダンス』、『現代的なリズムのダンス』で構成され、イメージをとらえた表現や踊りを通じた交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動で、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージをとらえて自己を表現したりすることに楽しさや喜びを味わうことのできる運動」としている。そのように柳瀬(2009)が行った小学校表現運動の授業では「動きのまねをしたりして他者に同調しようとする様子」「力強いりでステップを踏んで踊る」といった子どもの姿が報告されている。しかし、小学校の表現運動系領域の実践において内田(2015)は、「指導者自身に表現運動の経験が少ない」「何をどう教えたらよいか分からない」「子供たちが踊ることに対して恥ずかしさや抵抗感がある」ということを挙げている。中学校ダンス領域の実践において、山崎ら(2014)は、教員から「ダンスは何を教えたらよいか難しい」「踊りのできについて良し悪しが分からず技能の評価に困る」「男女が一緒にダンスの授業ができるのか不安」などの声も上がっていると述べる。生徒への意識調査では、「難しい」「恥ずかしい」と回答していることを報告している。

麻生(1988)は、ダンス嫌いの主な原因は、学習の最も妨げになる「恥ずかしさ」であると指摘する。畑野・久山(2010)も教師が感じている「表現(運動)」の授業実施を継続するための最も大きな阻害要因は、児童の「恥ずかしさ」であると指摘している。表現ダンス領域における授業の難しさは表現運動領域の指導への不安と子どもの「恥ずかしさ」が共存していると考ええる。

上述してきたように、様々な実践研究において、活動に意欲的に参加する姿が確認されている中、「恥ずかしさ」が要因で活動に参加しない(できない)子どもも確認されている。そこで、本研究は表現運動領域の授業で子どもの「動き」の変容と授業参加の様子を参与観察し、観察記録を元に、表現運動領域の学習における「恥ずかしさ」軽減のきっかけを見出し、表現運動領域の授業において、導き出したきっかけをつくるしかけを検討していきたい。

2. 研究方法

(1) 研究対象

徳島市立K小学校の第4学年1組の28名。

(2) 調査時期

2019年1月16日、18日、22日、25日、29日(全5回)。

(3) 対象授業

体育授業の単元名「探検へ出かけよう」(全5

時間)で、表現運動領域の表現の授業とした。

(4) データ収集法と分析方法

実際に体育の授業に入り込み、参与観察していく中で問いを見つけ、解き明かしていくエスノグラフィーを用いる。インタビューやビデオ撮影から授業の様子を文字テキスト化し、Maxqdaで分析を試みた。Maxqdaは質的データ分析用の専用ソフトである。

3.分析

(1)カテゴリ分け

文字テキストから授業の様子にふさわしい内容の名称をつけてコードとして振り分けた。その後コードをカテゴリに分けた。

(2) コードマトリックス・ブラウザ

コードマトリックス・ブラウザを用いてコードやサブコード、サブカテゴリ、カテゴリが何時間目にどれだけの頻度で抽出されているかの分析を行った。

(3) コード間関係ブラウザ

コード間関係ブラウザを用いてコードやサブコード、カテゴリ、サブカテゴリが他のコード、サブコード、カテゴリやサブカテゴリコード、サブコードとの間の関係性の分析を行うためにコード間関係ブラウザを使用した。

(1), (2), (3)から授業時間でのコード数の変化、コード同士との関係から以下二つの検討をした。

・活動を重ねることでの変化に関する検討

授業で繰り返し、踊ること、踊るという授業の空間に慣れてしまい、恥ずかしさが軽減されと考えられる。

・活動を仲間同士ですることでの変化に関する検討

個人ではなく、集団で表現活動することが、意欲的な活動につながっていると考えられる。

授業中の子どもの発言からは、「仲間や他者と一緒に活動することによって、恥ずかしさを軽減させた」「チーム分けをすることで恥ずかしさが軽減した。」などと考えられる発言があった。

4. 結論

授業の中では子どもが自由に表現できる活動を重ねることで、恥ずかしさが軽減されるといった内容の発言が見られるようになった。子どもたちの授業の空間への「慣れ」が、「恥ずかしさ」を軽減させる、学習形態が影響し、活動しやすくなるようだ。他者とかかわり合うことで自然と動きが変化する。「場」を生成させることにより、他者とかかわりが担保され、「恥ずかしさ」が軽減させることができるのではないだろうか。

このようなことから子どもたちに授業の空間に慣れを生じさせること、他者とかかわり合うことで「恥ずかしさ」が軽減することを見出せることができた。

今後これらのように、「子どもたちに授業の空間に慣れを生じさせる」「情報的相互作用と心理的相互作用が生まれる『場』が生まれるように設定する」などをしかけをつくり、「場」が展開するかじ取りをすることで、表現運動領域の「恥ずかしさ」を軽減させることに効果的なのではないかと考えられる。

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

三好 徹

指導教員 藤田 雅文

I 諸言

文部科学省の「教員労働実態調査」(2016)では、中学校 399 校 10,687 名の教員に調査を行っており、看過できない教員の勤務実態を明らかにしている。このため、文部科学省は「学校における働き方改革」を公表し、教員が心身の健康を損なうことのないよう、業務の質的転換を図り、限られた時間の中で、児童生徒に接する時間を十分に確保し、児童生徒に真に必要な総合的な指導を持続的に行うことができるようにすることを目指している。しかし、中学校教員の57.7%が、週60時間以上勤務している。つまり、月 80 時間以上の過労死ラインを超える時間外労働をしている。さらに、自宅残業を含めると、教員は平均して、週 4～5 時間程度の自宅残業をしており、これを加えると過労死ラインを超える人の割合は、中学校教員の 74.1%と大幅に増加する。しかしこれは、中学校教員全体の平均であり、各教科の結果と高等学校教員の結果が出ていない。

高等学校では、部活動や補習などに力を入れて、土曜日、日曜日でも学校に出勤しなければならない状況になっている。中学校では「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」(2018)により、運動部活動の活動時間及び休養日の設定など、業務改善が進んでいるところはある。しかし、このガイドラインの対象は、

義務教育である中学校段階の運動部活動を主な対象としており、高等学校は含まれていない。

そこで、本研究では、中学校・高等学校保健体育科教員の勤務実態と健康状況を明らかにしていき、今後の対策を検討していく。

II 研究方法

1. 調査の対象

全国学校総覧 2019 年版より、等間隔に抽出した中学校 400 校、高等学校 400 校、計 800 校の保健体育科主任を対象とした。

2. 調査の方法

郵送による質問紙調査

3. 調査期間・回収率

調査は令和元年 8 月～同年 10 月に実施した。回収状況は、送付数 800 部、回収数 283 部、回収率 35.4%であった。

4. 質問紙調査の内容

(1) 回答者の属性

①年齢 ②性別 ③教職歴 ④通勤方法
⑤通勤時間 ⑥現在校の勤務年数

(2) 学校での勤務状況

①担当教科と 1 週間のコマ数
②出勤時間 ③退勤時間
④学校滞在時間 ⑤学級担任の有無
⑥昼休み取得状況 ⑦超過勤務時間
⑧持ち帰り仕事 ⑨休日出勤 ⑩多忙感

(3) 健康状況

- ①将来の健康不安
- ②定期健康診断の有無
- ③喫煙の有無 ④飲酒の頻度
- ⑤職業性ストレス簡易調査票を用いた
ストレスチェック

(4) 部活動

- ①担当部活動 ②希望の有無
- ③競技経験 ④活動日数
- ⑤活動日数の増減 ⑥外部指導者の有無
- ⑦事務と管理面を担当する教員の有無

(5) 働き方改革の進捗度

- ①登下校に関する対応
- ②学校徴収金の徴収・管理
- ③調査・統計等への回答等
- ④部活動 ⑤授業準備
- ⑥学習評価や成績処理
- ⑦学校行事等の準備・運営
- ⑧支援が必要な生徒・家庭への対応

5. 分析方法

Microsoft Excel 2013 にデータ入力し、単純集計及びクロス集計を行った。また、統計ソフト js-STAR により、 χ^2 検定、正確二項検定を行った。

IV 総括

1. 保健体育科教員の勤務実態

学校の滞在時間が12時間以上の教員が全体の55.8%を占めていることが分かった。また、休日出勤について、「殆ど全ての休日出勤」「5日以上」と回答した教員を合わせると、79.9%が頻繁に休日出勤をしていることがわかった。さらに、多忙感については7割の教員が多忙だったと感じていることが分かった。

2. 保健体育科教員の健康状況

「職業ストレス簡易調査表」により、「身体愁訴」「抑うつ感」が強いというストレス症状は、9割以上で、「身体的負担度」「仕事の量的・質的負担」が大きいことが主なストレス要因であることが分かった。また、将来の健康に不安を抱える教員は8割を超えていた。

3. 部活動

活動日数の増減に関して、6割の中学校で減ったことが明らかとなった。部活動指導の助けとなる外部指導者がいるのは3割ほどで、あまり導入されていないことが分かった。保健体育科教員であるため、外部指導者がいなくても専門的な指導等ができていないのではないかと考えられる。

4. 勤務校での働き方改革の進捗状況

対策が取られだして2年目であったため、部活動以外の項目は変わっていないことが分かった。部活動では中学校が進んでいることが明らかとなった。

V 今後の課題

本研究では、保健体育科教員の勤務実態と健康状況を明らかにし、中学校と高等学校による比較を行ったが、それ以外にも公立校と私立校、保健体育科教員と他教科の教員などの多様な比較があると考えられる。

また、学校における働き方改革が始まって、2年足らずしかたっていないことから、その効果を十分に明らかにすることができなかった。

これら2つの点が今後の研究課題である。

バドミントン競技におけるハイバックハンド・ストロークの動作解析
～飛距離に貢献する要因について～

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

山田智博

指導教員 松井敦典

I. 緒言

バドミントン競技において、ハイバックハンド・ストローク（以下 HBS）とは自陣のコートのラケットを持っている手と逆側の上空に飛来したシャトルを、バックハンドを用いて自分の上方で打球する打ち方である。長崎ら（1994）も HBS は欠くことのできないショットであり、その必要性はレベルの高いゲームになるにつれて高まることを述べており、HBS が重要なショットであることは明白である。しかし、同論文で HBS は「実際には『非常に難しいストローク』としてとらえられ、できるだけフォアハンドのオーバーヘッドストロークを用いてゲームをすすめる傾向がある」と述べている。特に小学生や中学生といったジュニア期や初心者など、技術的に未熟な段階ではこの傾向が強いと見受けられる。また、指導する場合においても、HBS を用いらずに、フォアハンドのオーバーヘッドストロークを用いるように指導することが一般的である。

これらの根本的な原因として、フォアハンドのオーバーヘッドストロークに比べ、HBS の打ち方の特徴が十分に明らかになっていない点や、HBS は、飛距離を出すには、高い技能が求められるストロークであることが挙げられるだろう。そこで本研究では HBS において、飛距離に貢献する要因を検出し、飛距離の出る HBS の特徴をあきらかにすることで、HBS を合理的・

効率的に指導するための基礎資料を得ることを目的とする。

II. 研究方法

1. 実験期日・場所

本実験は鳴門教育大学体育館と敬和学院大学体育館、日本大学笹目バドミントン場で行った。期日は以下である。

2019 年 2 月 18 日 鳴門教育大学体育館

2019 年 9 月 13 日 敬和学院大学体育館

2019 年 10 月 7 日 日本大学笹目バドミントン場

2. 被験者

被験者は実業団チーム SUTTLE AND SONS 所属の山口容正選手と敬和学園大学の男子バドミントン部員 10 名、徳島県内の大学の男子バドミントン部員 9 名である。実績は日本トップレベルから競技歴 1 年の初心者である。

3. 実験方法

被験者のバックハンド側のコート側方の前方と後方にハイスピードカメラ DMC-FZH1(株式会社パナソニック製)を各 1 台ずつ接地し、撮影速度は 120fps、分解能は 1920×1080pixel にて撮影を行った。

試技は被験者がホームポジションで構えた姿勢から球出しを行い、HBS でストレートにクリアを打つように指示をした。試技は一人 3 回ずつ行い、不備があった場合は撮り直した。

4. 分析方法

本研究では動作解析ソフト Frame-DIAS V (株式会社ディケイエイチ) を使用し、三次元 DLT 法を用いた動作分析を行った。空間設定は、左右の水平方向を X、前後の水平方向を Y、垂直方向を Z として行った。そのデータを基にスティックピクチャーを作成し、各点の変位、速度、角度、動作様式を算出して、HBS の動作を分析した。ここから得られたデータを基に、JMP11 (SAS 社製) を用いてデータの種類に応じて分散分析と相関分析の統計処理を行った。尚、有意差は 5%未満に設定した。また、実績を考慮し上位群を山口選手と敬和学園大学のバドミントン部員、下位群を徳島県内のバドミントン部員として分析を行った。

5. 飛距離の評価について

飛距離の評価は得られたデータを基にシャトルの前方への水平速度と垂直速度から、この合成速度と打ち出し角を算出し、上位群におけるこの平均値を、下位群が目指す指標とした。

III. 結果と考察

本実験から得られた結果と、ここから下位群が目指す評価パラメーターの指標と改善すべき HBS の動作様式の特徴を以下に示す。

- 下位群が目指すシャトルの前方への水平速度と垂直速度の合成初速は 45.51739m/s である。
- 下位群は安定して約 26 度に打ち出すことを目指しつつ、左右方向へのブレを少なくする必要がある。
- フォワードスイングの加速のためにラケットヘッドが下に向くまで十分にテイクバックをとること。
- 手首を使ってラケットの面を返ししながら点でとらえること。

- インパクト後すぐにフォロースルーが止まるような手首の使い方をすること。またその時に反動で跳ね返り動作があっても良い。
- 前腕の回外だけでなく、尺屈をしながらスイングをすること。

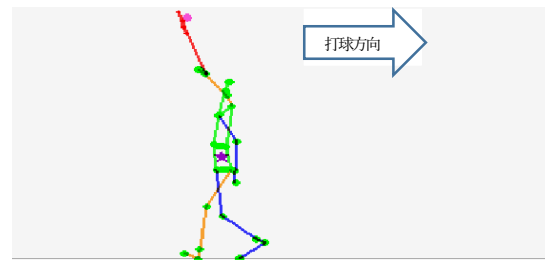


図 3-1 被検者 A のインパクト時点の YZ 平面におけるスティックピクチャー

IV. 総括

本研究において、前述したことが明らかになり、一般的に行われている前腕の回内と回外に重視しすぎた指導法、特にジュニア期や初心者の指導法の改善が必要である。さらに HBS の特徴を明らかにするため、実験方法等を再検討しつつ分析する必要がある。

V. 引用・参考文献

- 長崎浩爾・寺島浩・原利昭・篠田邦彦・牛山幸彦 (1994) バドミントン競技におけるハイバックハンド・ストローク動作の分析 ―ラケット・シャフトの撓りの検討―. 日本体育学会 第 45 回大会号: p 358.
- 長崎浩爾・寺島浩・原利昭・篠田邦彦・牛山幸彦 (1995) バドミントン競技におけるハイバックハンド・ストローク動作の分析 ～上司の運動について～. 日本機械学会 北陸信越支部第 32 期総会・公園会議門論文集: pp17-18.
- 入来篤史(2004)道具を使うサル. 医学書院: pp62-68, pp72-74.
- 乾信之(2016)巧みさを発達させる幼少体育. 溪水社: p51.

剣道における熟達者と未熟達者の認知特性の違い

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

中川 沙弥

指導教員 木原資裕

1. 緒言

剣道は生涯スポーツとして最適な武道であり、実際に多くの高齢者が現役の剣士として活躍している。そしてその実力は「老いてなお強し」の言葉に象徴されるように体力や俊敏さに勝る若手剣士を寄せ付けない。つまり剣道競技者としての技能は力や速さといった身体的能力以上に、相手の攻撃や状況を的確に判断し対処行動を選択する認知的能力が重要であるといえる。つまり「老いてなお強し」という言葉は認知的能力の熟達に伴い体現される状態であると推測するが、では認知的に熟達した状態はどのようにして起こり、熟達者はどのように状況を捉えているのであろうか。本研究では熟達者と未熟達者の認知パターンの差異を明確にすることで剣道の新たな魅力を発見するとともに、剣道のさらなる発展につながる知見を得ることを目的とする。

2. 方法

（1）対象

対象者は小学生 22 名、中学生 7 名、高校生 16 名、大学生 14 名、一般 22 名、小学生の保護者 9 名とした。実験に先立ち、研究内容を詳述したインフォームドコンセントを行い、被験者となることの同意を得た。

（2）実験設定

2 分間の立ち合い稽古の映像の中から、片

方の選手が有効打突を決める直前の場面が映像の最後になるように 25 秒(図 1)と 23 秒(図 2)の場면을抜き出した。被験者には、映像が止まった次の瞬間にどちらの選手のどのような技が決まったと思うか、技を決めた選手はなぜその技を決めることができたと思うかを回答させた。映像を映すモニターには Tobii Eye Tracker 4C を装着し視線の動きを計測した。また、回答を録音し回答内容を精査するとともに、回答までにかかった時間を計測した。



図 1 一本目の技



図 2 二本目の技

3. 結果と考察

(1) 一本目の結果

一本目の技の予測結果は正答率 68%・誤答率 32%, 中学生と一般は正答率 100%, 高校生は正答・誤答ともに 50%, 保護者のみ誤答率が高くなった。誤答内容は, 小学生は多岐に渡った。高校生と大学生は左の選手が小手, あるいは面, 保護者は左の選手が小手, となった。回答までの時間の比較では, 正答と誤答の間に有意差はなく, また, 各群間での有意差も認められなかった。

(2) 二本目の結果

二本目の技の予測結果はそれぞれ高い正答率となり, 中学生と高校生は正答率 100% であった。誤答内容は分散した。回答までの時間の比較では, 正答と誤答の間に有意傾向が見られた。また, 正答の場合の各群間における回答までの時間の比較では, 小学生と高校生の間で $p<.001$, 小学生と一般の間で $p<.05$, 小学生と大学生の間で $p<.10$, 高校生と大学生の間で $p<.10$, 一般と保護者の間で $p<.05$ がそれぞれ認められた。

(3) 回答内容の分析

回答を言語データとして文章化し, その中で文脈情報(現在より以前の事象の情報: 本研究では攻めに関する表現)に着目し回答内容を分析した。文脈情報について言及した被験者は一本目, 大学生一人, 一般 11 人, 二本目では中学生 1 人, 高校生 1 人, 大学生 3 人, 一般 7 人であった。文脈情報は正答からのみ出現し, 誤答からは出なかった。文脈情報に関する一般群における回答までの時間の比較では, 一本目, 二本目ともに文脈情報ありの群が回答までにやや時間を要したが, どちらも有意差は認められ

なかった。

(4) 被験者ごとの視線配置と回答までの時間・技の予測結果・回答内容

小学生と保護者の多くが停止した映像の中から回答につながる情報を得ようとするような視線の動きを見せ, それらの多くが眼球を小刻みに素早く動かすサッケードをみせた。高校生の中にも停止した映像の中から状況を読み取ろうとする被験者も散見されたが, その際にはサッケードはあまりみられなかった。回答までの時間が短い場合は視線の動きは少なく, 回答までの時間が長い場合は脈絡なく視線を動かす場面が多くみられた。

(5) 考察

剣道は間の攻防であり, 間は時間と空間の二つの意味を持つ。また, 「情報とは「物質・エネルギーの時間的・空間的, 定性的・定量的パターンである」と定義されている」(高橋 1979)。空間的な間の情報については年齢が低い, または経験年数が浅い被験者でも比較的容易に読み取れるが, 時間的な間, つまり攻めに関する情報は一般群以外で言及した被験者は多くなかった。これらのことから時間的な間を定性的に読み取れるか否かが認知的熟達を示す一つの指標になるのではないかと推測する。一方, 一般群の多くの被験者が文脈情報について言及したが, 文脈情報についての言及の有無に関しては年齢, 経験年数等は干渉しない。このことから, 認知的熟達は加齢とともに熟達するのではなく, 運動プログラムの定着, 既有知識の質的・量的な獲得, さらにその既有知識を適切に, かつ, 柔軟に使い分けられる能力が重要であることが示唆された。

中学校体育授業「剣道」における導入のあり方に関する研究

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース(保健体育)

田邊 航

指導教員 木原資裕

1. 緒言

平成24年に学習指導要領が改訂され、中学校では武道が必修化となった。これにより、これまで剣道を経験したことのない生徒も、授業を通して剣道を経験するようになっていく。

一方、「竹刀が重たい」、「打たれたら痛そう」、「怖い」といったネガティブな意見があり、剣道初心者の中には剣道に対する抵抗感を持っている生徒も多くいることが想定される。さらに、動きや所作法の説明が長く、1時間あたりの運動量が少ないというのもネガティブな要因の1つと考えられる。また、実際の学校現場の中には、剣道に関する知識と技能を有した体育教員が必ずしも剣道授業を行っているとは限らず、外部からの指導者に授業を委託している場合や、剣道初心者の体育教員による剣道授業が行われている場合も少なくない。

そうした中で、剣道授業のネガティブなイメージを払拭するためには、剣道授業の導入段階における授業内容のあり方が重要であると考えた。そこで本研究では、竹刀や簡易用具よりも扱いやすく、なおかつ竹刀に見立てて扱うことができる手刀での活動を導入段階に取り入れた授業を構想し、授業実践を通してどれだけ剣道初心者の剣道に対する抵抗感を緩和できたかや、楽しく剣道の攻防が学べたか、運動量の確保につながったかなどの検討を目的とした。

これまでの先行研究として、有山による「剣道のかげひきの動きを習得する-竹刀を用いない

プログラム-」が行われている。これは、剣道のかげひきに注目したもので、竹刀を用いずに剣道のかげひきを段階的に指導する実践である。

また、田原による「剣道初心者指導における片手打ちの検討」がある。これは、片手打ち競技として行われている短剣道やスポーツチャンバラに着目し、剣道の初心者指導への対応を検討したものである。

2. 研究方法

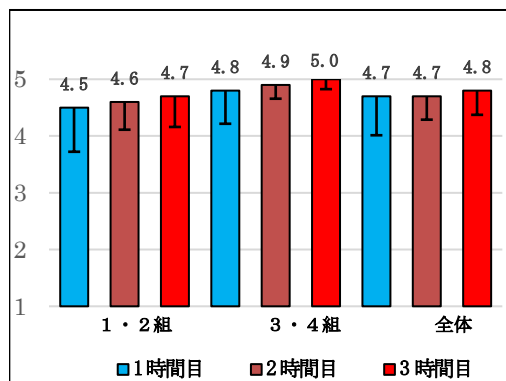
- 1)平成30年の11月から12月までの鳴門教育大学大学院の授業「教育実践フィールド研究」において、鳴門教育大学附属中学校1年女子を対象に、2クラス合同で各3回の実践を行い、検討を行った。
- 2)毎授業アンケート調査及び授業評価を行い、授業ごとにエクセルに記入し、有意差を算出し、その内容を分析した。
- 3)剣道授業をすべてデジタルカメラで収録し、授業ごとにパソコンに取り込み動画ファイルを作成した。その動画をパソコン上で視聴しながら、検討を要する場面を画像として収集した。
- 4)よりよい授業実践を行うため、様々な剣道経験者の剣道授業実践例を収集し、その内容を分析した。

3. 結果と考察

毎授業終了時に授業評価アンケートを行った。アンケートの集計にあたり、「非常によく当ては

まる」を5点,「全く当てはまらない」を1点とし,それぞれの項目の数値をもとにして有意差を算出し,検討を行った。

Q 1. 楽しく活動ができた



上記の項目に対し,数値が徐々に高くなっていた傾向がみられる。これは3時間を通して生徒の充実感が得られる実践内容であったことがうかがえる。

その他にも,Q2「たくさん動けた」,Q3「礼儀を意識して行えた」,Q4「大きな声を出せた」,Q5「足さばきがうまく行えた」,Q6「剣道に興味がわいた」という質問をしたところ,Q2,Q3,Q5,Q6において3時間目に一番大きな数値を示すという有意な差がみられた。



授業実践の様子

4. 結語

今回の実践において,手刀が導入段階の教材として効果的だと思われる点を列記すると以下のようなになる。

①従来の剣道授業の問題点を解決することができ,教材としても実践可能な内容であること。また剣道の攻防などを楽しく学べ,その後の本格的な剣道指導の際の動きにも十分生かせること。

②相手を思いやることや礼儀を重んじることなど,剣道のもつ教育的意義を含んだ教材であること。

③剣道への興味・関心につながる。

また,今後の課題として再検討を要する点を以下のようにまとめた。

①手刀の構えの意識化である。手刀の構えが崩れてしまう生徒や場面が多いため,毎授業の始めや合間の時間に確認作業をこまめに行うことが必要だと感じた。

②手刀での活動の際に他の生徒との接触が多く見られたため,安全性を確保する場の設定が必要である。

③竹刀への移行の際に手刀とのギャップを軽減すること。

④今回は女子生徒のみの授業実践であったが,これを男子生徒にした場合や男女共修の場合どのように行うかという点。

手刀という教材を導入段階で取り入れることで剣道授業に関する多くの問題の解決につながり,学校剣道としての新しい展開の可能性が見られたのではないだろうか。しかし,一般的な普及については,前述した改善点の他にも,剣道初心者が授業指導に当たる場合を想定した指導内容の検討や授業実施の時期,活動場所などに関しても検討が必要である。

今後は,さらに様々な角度から授業実践における取り組みが行われると予想されるがその一端として手刀が学校剣道の導入教材として生かされることを期待する。

中学校サッカー選手とクラブチームサッカー選手の
サッカーに対する意識に関する比較研究

教科・領域教育専攻

指導教員 藤田 雅文

生活 健康系（保健体育）コース
大原 航平

I. 緒言

現在、中学生年代のサッカー選手は、中学校の部活動かクラブチームに入ることが選択できる。1985年に日本クラブユースサッカー連盟が発足され、クラブチームの数も多くなってきた。2018年度の第3種（中学生年代）の選手登録数は、236,524人で、クラブチームに所属している選手は40,181人である。前年度の登録人数に比べると、競技人口は減っているが、クラブチームに所属する中学生は増えていた。中学生年代の主要大会の出場チームはクラブチームがほとんどであり、高円宮杯 J F A 全日本 U-15 サッカー選手権大会は、1989年に第1回大会が開催され、今年で31回目の開催になるが、中学校のサッカー部が優勝したのは2回のみで、2002年の第14回大会から現在まで中学校のサッカー部はベスト4以上に入っていない。また、今年度の高校サッカー選手権大会の登録メンバーもクラブチーム出身者の割合が75%を超えていた。J1に所属しているプロサッカー選手の中学生時の出身チームもクラブチームが73%を超えていたのに対して、中学部活動出身者は11%となっている。

平成30年3月に「運動部活動のあり方に関する総合的なガイドライン」が策定され、中学部活動に所属しているサッカー選手は練習時間が制限され、クラブチームに所属しているサッカー選手よりもサッカーに関わる時間が減ると考えられる。

本研究では、中学部活動に所属しているサッカー選手と、クラブチームに所属しているサッカー選手のサッカー有能感、アスリートライフスキル、学校生活スキル等を明らかにしていき、今後の中学部活動とクラブチームのあり方について検討し

ていく。

II. 研究方法

1. 調査の対象

中学部活動・クラブチームに所属しているサッカー選手各300名

2. 調査の方法

訪問・留置法による質問紙調査

3. 質問紙調査の内容

(1) 回答者の属性

- ① 学年
- ② サッカー経験年数
- ③ レギュラー
- ④ 選抜経験

(2) サッカー有能感

- ① パス・ボールコントロール
- ② フィジカル
- ③ スピード・持久力
- ④ ヘディング
- ⑤ 対人スキル
- ⑥ 戦術理解
- ⑦ 競技意欲

(3) ライフスキル

- ① 自己管理
- ② 目標設定
- ③ 礼儀・マナー

(4) 学校生活スキル

- ① 自己学習
- ② 進路選択
- ③ 集団生活

Ⅲ. 今後の予定

中学部活動に所属しているサッカー選手よりクラブチームに所属しているサッカー選手の方が、サッカーに対しての将来像や計画を立てていると考える。しかし、クラブチームは、サッカーに重きを置いて、学校生活の指導は行われていないと考える。

また、文献研究によって、質問紙調査の内容について再検討し、そこから見えてくる中学部活動とクラブチームの現状や課題を明らかにし、中学部活動とクラブチームのあり方について検討していきたい。

Ⅳ. 参考文献

- 1) 公益財団法人日本サッカー協会 web ページ
<http://www.jfa.jp>
- 2) 公益財団法人日本中学体育連盟 web ページ
<http://njpa.sakura.ne.jp>
- 3) 公益財団法人日本プロサッカーリーグ(J リーグ)web ページ
<https://www.jleague.jp>
- 4) 清水聖志人・島本好平・河野隆志・山本浩二・岡井理香, (2018), ユースアスリート用ライフスキル評価尺度の開発, 笹川スポーツ研究助成:208-213
- 5) 飯田順子・石隈利紀, (2002), 中学生の学校生活スキルに関する研究—学校生活スキル尺度(中学生版)の開発—, 教育心理学研究, 50:225-236
- 6) 安部久貴・村瀬浩二・落合優・射手矢岬・鈴木直樹, (2018), 指導者の言葉がけがユース年代の選手のサッカー有能感に与える影響, 体育学研究, 63:87-102

Ⅴ. 資料

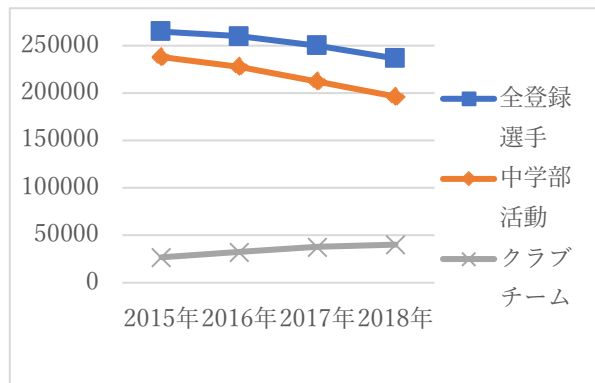


図1 第3種(中学生年代)登録選手推移

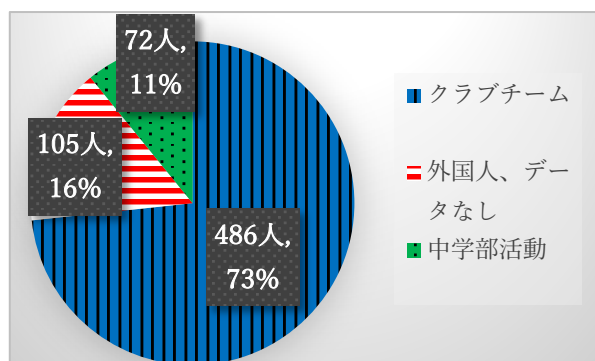


図2 J1リーグ登録選手中学出身チーム

体育学習における円形の場合設定の意味と効果に関する一考察

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

小川浩平

指導教員 湯口雅史

1. 緒言

今回改定された新学習指導要領にも、「簡易化されたゲーム」や「易しい場」という語が記載されている。この「簡易化されたゲーム」や「易しい場」を設定した体育授業では、多くの場合、オフィシャルルールを基にした場やルールの設定である。しかし、生涯スポーツの枠組みの中において、スポーツ文化が大きく様変わりしつつある現在、スポーツの在り方は競技スポーツをピラミッドの頂点にすえ、大衆スポーツをその底辺におくスポーツの価値認識から、競技スポーツを志向する人々や生涯スポーツを志向する人々、そして、健康の保持増進のための健康スポーツを志向する人々、スポーツを志向する人たちの意味の在り方に応じた多様なかわり方が進みつつある。稲垣（2001）はこのような現状を、「脱種目の考え方」と定義付けている。

このような脱種目の考え方を体育授業にもち込もうとした時、上述した、オフィシャルルールを変化させた「簡易化されたゲーム」や「場の工夫」では説明できないのではないだろうか。そこで、子どもが「スポーツする意味」を共有しながら体育授業を楽しむための、場やルールの工夫について検討していきたいと考えた。

とりわけ、本研究では、場の工夫に焦点化させ、スポーツする意味を共有しながら体育学習を展開する子どもの様子を見取り、どのような楽しみを感じているのかについて見出していきたい

と考えている。

2. 「教材づくり」についての先行研究

岩田（2005）は、侵入型のゲームにおける教材づくりについて、「学習内容を明確にし、それを典型的に含んだ学びやすい運動課題を構成していくことであり、また、子どもの主体的な諸条件に適合する課題を生み出していくことを意味する。」と述べ、「やさしい教材づくり」の必要性を論じている。そこでは、ゲームをミニ化するだけでは、依然大人のゲームの複雑さを持ち越してしまう。ゲームが真に子供にとって戦術的思考を促すものであるとすれば、今持っている力でプレイを十分可能にするようなゲームを設定することこそ、子どもがゲームを学ぶ前提条件となり、それに向けての教材づくりの探求は、これからの体育学習において中心的な課題であると結論づけている。

また、岩田らは（2006）、ボール運動は、単なる「競争」としての「偶然のゲーム」から脱皮し、子どもたちがプレイの状況判断・選択に十全に参加していけるところにゲームのおもしろさを保障する源泉を見出さなければならないと指摘する。そして、侵入型ゲームの教材づくりにおいて、意図的・選択的な判断に基づく共同的プレイのおもしろさを探求することをベースとして、子どもが今持っている力の範囲において十全に機能するゲームの構築が重要であり、それは、「オーセンティック（本物の；真正な）

ゲーム」として成立させなければならないと、既成のスポーツ種目からの脱皮を示唆している。

このように、小学校体育における教材づくりにおいては、大人によってプレイされているスポーツの形を、子どもにとっての本物のゲームとして成立させなければならないと考える。

3. 予備観察

予備調査として、徳島市内のT小学校の第4学年小型ハードル走の授業を観察した。その後、授業者に子どもの様子を記録した動画を見たりして、子どもの学びの姿を調査した。授業は、ハードル走の意味を「移動するおもしろさ」として、「いかにしてゴールまで走るか」を子どもが探索することとしていた。そして、問いを「スピードを落とさず走ってきてバトンをわたそう」とし、直径14mの円形コースをつくり、円周上にハードルを5個置いていた。授業者に子どもの学びの様子を聞くと、「円周上に置いてあるミニハードルをどのように走るかについて、歩数を調整したり、内コース、外コースどちらを走るかとチームで話し合ったりしながら競争を楽しんでいた。」「ある子が、内側コースのほうが走る距離が短いので早く帰ってこられると思っていたが、外側のハードルを跳ぶほうが、スピードが落ちないのでたぶん速く帰ってこられる、と訴えていた。そして、そのチームは、ハードル間の走り方について話し合っていた。」というエピソードを話していただいた。そして、授業者は、「本授業は、リレー形式にしたことと、コースを円形にしたことで、子ども自らが『どのようにして速く帰ってこようか』という探索を楽しみながら活動していた。」「直線コースのハードル走の授業は、自分の力に合わせてインターバルを選択する授業であったが、今回の授業は、置かれたハードルをいかにスピードを落とさず走り切るかという走り方の思考が単元の早

い段階から生まれていた。」という感想をいただいた。

4. 研究の方法

(1) 研究対象

徳島県内の複数の小学校を予定

(2) 調査時期

2020年2月中旬～5月を予定

(3) 対象授業

円形型の場設定を取り入れた体育授業

(4) 研究の方法

・参与観察によるエピソード法（質的研究）

(5) データ収集と分析

① 収集方法

・円形の場を取り入れた授業を、参与観察しデータ収集を行う。

・観察したデータ（エピソード）を書き起こす

② 分析

・参与観察で収集したデータ（エピソードを解釈していく。

5. 今後の研究

① 体育学習の場の意味や先行研究の調査

② 円形の場を取り入れた小学校体育授業における、エピソードを収集

③ 収集したデータの解釈

④ 効果の検討と有用性の整理

<引用・参考文献>

1) 稲垣正浩（2001） スポーツ文化の脱構築

2) 岩田靖（2005） 小学校体育におけるにおけるボール運動の教材づくりに関する検討ー「侵入型ゲーム」における「明示的誇張」の意味と方法の探求ー

3) 岩田靖（2006） 小学校体育における中学年の侵入型ゲームの教材づくりとその検討ー「V字型ゴールハンドボール」ゲームの修正とその成果に関する分析ー

小規模校における合同体育授業の実態調査

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース(保健体育)

釜 圭吾

指導教員

湯口雅史

1. 緒言

近年の少子化問題は、学校の統合や廃校についての議論を余儀なくしている。筆者の母校の中学校も数年前廃校になり、他の中学校と統合された。廃校になる前から、生徒の人数が減っており、筆者が在学中から、統合についてはよく耳にしていた。そのような環境の中で育ったということもあり、小規模校の実態について興味をもっていた。

筆者の学校生活は、1クラス10数名程度でクラス替えがなく、幼稚園から中学校まで11年間、気心が知れた仲間と過ごした。そのため意見が食い違っても、仲の修復は早かったり、物事がうまくいかない時には周りの支えあったりと、大きなアクシデントになる前に対処でき「どうしようか」という葛藤があまりなかったことを思い出す。

新学習指導要領では、コンテンツベースからコンピテンシーベースという動きがあり、コンピテンシーを重視するカリキュラム・マネジメントの重要性を説明している。

OECDは2015年から「Education2030プロジェクト」に取り組んでおり、その中間報告に当たるポジションペーパーが2018年に出された。このプロジェクトは、2030年の近未来において子どもたちに求められるカリキュラムや教授法、学習評価などについて検討しているものである。Education2030プロジェクトの全容が書かれた「学びの羅針盤」では、DeSeCoプ

ロジェクトで定義したキー・コンピテンシーのほかに、①新たな価値を創造する力、②責任ある行動をとる力、③対立やジレンマを調整する力の三つの要素を設定し、それらを「変革を起こす力のあるコンピテンシー」としてひとまとめにした。それらを「Agency」という新しい概念として説明している。

そこで筆者の学校生活での体験を照らし合わせ注目したのが「Agency」の概念の中にある、「対立やジレンマを調整する力」である。小規模校では、人間関係の変化が少なく大規模校に比べ対立やジレンマが生まれにくい環境にあるように感じる。その中で小規模校に在学している児童はどのように対立やジレンマを調整する力が育っていくのだろうか疑問をもった。

小規模校に関する学校教育のメリットやデメリットに関する先行研究や教師の立場からみた小規模校の実態についての先行研究は多く存在するものの、日常生活の観察を基にした児童の資質能力についての研究は少ない。

そこで、本研究では小規模校に参与観察者として入り込み、学校生活、とりわけ、運動遊びや体育の時間での様子をから対立やジレンマ起こった時の子どもの心情を参与観察し、運動への取り組み方や意欲や意識の様子を記録する。そのデータを基に小規模校における児童はどのような調整力が育成されているのかについて解明していきたい。

2. 先行研究の把握

池田ら(2012)はある島の小学校教師を対象とした教師の立場から見た小規模校の良さや課題についてのアンケート調査を行った。小規模校の体育授業では、細部に配慮した授業づくりの工夫が求められ、ルールの変更だけではなく、コート サイズ、ボールの硬さ、大きさ等を見つめ直す必要があることが考えられたとした。また、個人差に関する問題は、解消するのではなく、体力や技術の差を活かす方法を考えることが大切であり、低学年や女子にもパスを回すなどルール上の工夫を行い、お互いが尊重しあう授業づくりを構成すべきだとしている。

小規模校における体育授業の良さとは、1人1人に目がよく行き届くことで、教師が児童と触れ合う機会が多く、きめ細やかな指導ができることが利点とした。そして、利点を活かすには、小さなゲームとすることで、競技のもつ醍醐味を味わわせ、活躍できる場面を作ることにあると考えられているとしている。このことは、目が行き届き、細かなかわりが可能なため、児童の行動が素早くなると報告している。それは、少人数のため、教師と児童の双方の関係が理解力及び行動力の向上につながると考えられ、課題として山間部などの小規模校も対象に研究の確立を行いたいとし、施設や器具がそろっていない場合での研究も述べられている。

以上のような教師のかかわり方や小規模校の良さについての先行研究は多々あるものの、児童の成長を資質・能力の視点から検討した研究は見当たらなかった。

3. 研究方法

(1) 研究対象

徳島県内の小学校(小規模校)

(2) 調査時期

2020年4月下旬から5月下旬(約1か月)を予定

(3) 研究の方法

・参与観察に基づく質的研究

参与観察は、対象者たちの活動に深くかわるため、詳細かつ正確な情報が得られるという利点がある。今回の研究では、小規模校の児童の学校生活に密着し、そこで起こっている、対立やジレンマの様子について調査するため、参与観察が適切であると考ええる。

(4) データ収集と分析

① 収集方法

- ・実際に小規模校の生活に密着し、参与観察を行い、データ収集を行う。
- ・観察内容(行動や発言など)を記述するフィールドノーツの作成をする。

② 分析

- ・参与観察で収集した質的データ(フィールドノーツ)を活用して解釈していく。

4. 今後の研究

- ・新学習指導要領が求める子どもを育成する能力の整理
- ・小規模校体育の実際(先行研究の整理)
- ・小規模校の体育授業や運動遊びに対する参与観察
- ・観察記録の分析
- ・小規模校の体育授業の今後の在り方について

〈引用・参考文献〉

- ・池田光功 宮田正和 岡村輝一 平田哲史
小規模校の良さを活かした体育の授業に関する基礎的研究 ―ある島の小学校の教師を対象としたアンケート調査の手がかりとして―
福岡教育大学紀要 第61号 第5分冊 pp.81-89 2012
- ・佐藤郁哉 フィールドワーク 書をもって街へ出よう 1992 新曜社

教育の一番札所



国立大学法人

鳴門教育大学

編集・印刷・発行

第1版令和2年2月7日

保健体育コース抄録集作成チーム